

「大腸ポリープ・ポリポース 臨床と病理」

東京大学教授・第1外科 武 藤 徹 一 郎 著

九州大学教授・第2外科

杉 町 圭 蔵

武藤徹一郎教授の大腸ポリープ・ポリポースに賭ける意気込みを、本書の端から端まで強く感じながら、一気に興味深く読ませていただいた。大腸ポリープ・ポリポースに関する多くの問題は、この1冊の中にすべて網羅されており、この本は後世に残るすばらしい本であり、是非多くの方々に読んでいただきたいと、自信を持ってお勧めする次第である。

本書には大きく3つの特徴があるように思う。第1は臨床的に大変重要なポリープの理解に、組織学的所見の重要性を説いておられる点である。臨床の理解に基礎(病理学)が必要なことは言うまでもないが、本書はこの点を見事に実践している。これは著者が英国の著名な病理学者 Dr. BC. Morson に学び、Surgeon としてのみならず、Pathologist としてもすばらしい才能と知識をお持ちであることに起因しているものであろう。大腸粘膜癌は病理学者間でも未だ診断基準にかなりの差異がある点を指摘し、この点についても、より客観的観点より記述されてい

る。

第2の特徴は図が多く用いられている点である。巻頭に94枚のカラー図譜があり、各々が大変重要で興味深いものばかりである。例えば、Cowden 病の角化性丘疹や軟部腫瘍はよく知られてはいるものの、教科書に写真を載せているものはこれまでになく、非常に貴重な写真である。また、本文中にはI～VII章で合計332枚の図が使われており、1ページに少なくとも1枚以上の図が掲載されていることになる。ポリープの肉眼写真、組織写真は大変美しく、図III-25に示されるようなポリープの立体的な横撮影は、芸術性すら感じさせてくれる。これらの多くの写真は文章では言い表すことのできない多くを読者に教えてくれ、本書をよりすばらしいものになっている。

第3の特徴は、必要かつ十分な文献が引用・掲載され、最後に各項目ごとにまとめられている点である。私は常々、良い本を作るためには偏りのない十分な情報収集が必要であり、それを著者自身が咀嚼し、読者にわかりやすく伝えることが必要で

あると考えている。このためには歴史的にみて、重要な文献はもとより、最近の文献まで取り入れる必要がある。本書では、大腸癌発生に関する遺伝子レベルの最新の知見も取り入れ、学生にもわかりやすく解説すると共に、de novo 癌発生についての問題提起も行っている。

以上の3つの特徴を持たせつつ、大腸ポリープ・ポリポースの診断と治療が体系的によくまとめられている。本書が医学生、研修医はもとより、一般の臨床医や病理学者にとっても必読の書であると確信し、推薦する次第である。著者が述べておられるように、日本ほど臨床家と病理学者の間で熱心にポリープの診断基準について discussion している国はないように思う。本書が、このような discussion の礎となることを期待してやまない。

● B5 332頁 図59 写真322
原色図94 1993 定価14,935円
(税込) 円400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)